

特集 リスト生誕200年

門倉光太郎
(パウゼ編集長)

フランツ・リスト。1811年10月22日にハンガリーに生まれたピアニスト、作曲家。ハンガリーに生まれたといっても、両親の血統や母語、また最も長く生きた土地がいずれもドイツ(リストが生まれたライディンゲンも当時はオーストリア帝国の支配下で、現在もオーストリアに属する)で、リスト本人もドイツ語で生まれ育ち、後にパリに本拠を移してからはフランス語を多用し、終生ハンガリー語を喋れなかったそうですが(この時代は、リストに限らずハンガリー人でありながらドイツ語しか話せない人が多かった)、本人はハンガリーを祖国と呼び、死後もハンガリー人と認識されるケースが多いですね。ドナウ川が氾濫し、ハンガリーに甚大な被害が及んだ時、チャリティー・コンサートを行い、ブダペストに多額の災害救助金を寄付しています。日本でも震災以来、チャリティー・コンサートが盛んですが、こういった義援金を募る演奏会を最初に行ったのもリストだったといえます。

幼少期から音楽の才能を示し、10歳前後から公式の演奏会に多数出演。11歳の時にウィーン音楽院に入り、日本ではピアノの教則本でお馴染みのツェルニーに師事。12歳の時にウィーンでの演奏会ではベートーヴェンに絶賛されました。しかし、彼の心を大きく動かしたのは、ヴァイオリンの鬼才、パガニーニの演奏を聴いて、ピアノにおいて超絶技巧を目指し始めました。元々手の大きかった彼のこと、超絶技巧を磨くにはもってこいです。技巧を駆使したリストの演奏はダイナミックで“ピアノの魔術師”といわれました。美男子であったことも手伝って、女性ファンの失神が続出したとの逸話も残っています。

作曲家としても、ピアニストであったことからピアノ曲を中心に作曲活動を行い、編曲が得意であったので、他の作曲家のオペラのパラフレーズを数多く残しましたが、このころの作品は現役のピアニストとしての演奏能力を披露する場面が多く含まれ、リストにとっては容易な曲であっても非常に困難なテクニックを要求する曲が多数残されています。

ピアノ曲に限らず、歌曲やオーケストラの作品も多く残しました。2曲のピアノ協奏曲(有名な第一番の初演はリストのピアノ・ソロ、指揮はベルリオーズであ

った)を始め、過去に作曲した自身のピアノ曲をオーケストラ用に編曲したり、あまり有名ではありませんが交響曲も残しています。また、交響詩という新しい形の標題音楽も創始しています。

私生活では、多くの女性と恋愛関係を結びました。特にマリー・ダグー伯爵夫人との駆け落ちは有名で、スイスへ逃避行、約10年間の同棲生活を送ります。2人の間には3人の子供が生まれ、その内の1人がワーグナーの妻になるコジマです。

リストは晩年、バイロイトに移ると虚血性心疾患・慢性気管支炎・鬱病・白内障など立て続けに多くの病気に苦しめられました。1886年、バイロイト音楽祭でワーグナーの楽劇『トリスタンとイゾルデ』を見た後に慢性気道閉塞と心筋梗塞で亡くなり、娘コジマの希望によりバイロイトの墓地に埋葬されました。

リストが最後に住んだ家はバイロイトのワーグナーの家の至近にあり、現在は記念館になっています。貴重な資料が数多くあり、館内には絶えず彼の作品が流れています。

リストには“軽やかさ”を・・・

芹澤ヨシノリ

「ちがう違う、ショパンはタタタタタじゃない、タタタタタが似合うのはリストだ、ショパンはタタタだ、ちがいが分かるかい？」

ショパン演奏の大家・アルトゥール・ルービンシュタインが弟子たちにショパンを指導する際の、非常に有名なことばです。(「王様ルービンシュタイン」107P)もうひとつ、引用をご容赦あれ。

「クラシックってリズムが弱いから、つままないって思われちゃうんだよね」っと、これは現役バリバリのジャズ・ロック系ミュージシャンながら、その実意外にも多い隠れクラシックファンの方々がしばしば漏らす本音です。まあ拙者もその中のひとりなわけですが。え？

「オマエは現役“バリバリ”じゃないだろ！」

はいスミマセン、本題に行きます。

生誕200年というのに、わが国では昨年のショパン・シューマンに比して今ひとつ盛上りに欠けるリスト君を応援すべく、上記の意見をもとに皆様、なかんづくピアノ関係者様各位に、ご提案申し上げたいと存じます。

ロマン派音楽は、産業革命の歩みとともに時を同じくして、この時代に台頭してきた中産階級〜プチ・ブルって人たちですね〜の経済基盤によって、随分と支

えられてきました。

彼らは所謂“成り金さん”たちですから、その娯楽趣向が貴族社会のそれとは異なり、これ見よがしの事大主義志向となってしまうのも、いささか仕方のないもの。我が国のバブル経済時代みたいなものですね。

音楽の世界においては、ベルリオーズに発するオーケストラの拡大化に拍車がかかり、作曲家はサウンドの豪華絢爛さを実現すべく、ひたすら音量の増大化・音色の多彩化と、それを支えるハーモニーに圧倒的な比重を置くようになります。これでは二重の意味でリズムが疎かにされてしまうのも無理はありません。管弦楽編成の巨大化が、同時にアンサンブルの柔軟性を損ねてしまうのは言うまでもないでしょう。音楽の三大要素の柱のひとつである“リズム”（またはビート）を軽視する、と言うより犠牲にしてまでも音の洪水状態に浸る方を快感とする、しかも、その状態に疑問さえ抱けなかった、というのが当時の風潮でした。・・・まっ、それは言い過ぎかな。一方で明らかに反動として、ワルツとサロン音楽が大流行してきましたね。ブラームスが室内楽に没頭したのも、その風潮に対するアンチテーゼととらえて間違いではありません。彼にもリズムが重苦しい曲少なくないですが（笑）。おっと、お話もとい。

そのピアノ版が“リスト”なわけで、彼の時代に日々めざましくめまぐるしく進化を遂げつつあるピアノに対して、オーケストラのそれに倣い音量・音数・音色・音域の大洪水化を実現すべく、極限の演奏技巧を追及して出来たのが彼のピアノ作品です。

そんなリストのピアノ曲が、ルービンシュタイン言うところの「タタタタ」という軽やかなリズムを持ってなくなって（というより弾けなくなって）、「タァタァタァ」にならざるを得ないのは至極あたりまえの結果であり、作曲後200年弱を経た今日、現代人たる我々が、リズムをないがしろにされた音楽に退屈感と眠気を覚えざるを得ないのも無理からぬことと言えます。でも、リストたち当時の音楽家が悪いのはなく、これは産業革命期なる時代の産んだ「病理」と呼ぶべきでしょう。ですから・・・

作曲上あまりに修辞学的に過剰と感じられる演出を取払って楽曲を身軽にしてあげ、躍動感溢れる「タタタタ」なリズム感&ビート感を以って再構築された彼のピアノ曲を披露してみれば、もっと多くの現代人のフィーリングにもフィットした音楽として理解してもらえるのではないのでしょうか、ショパンやシューマンのように。

現実的には、それは作品を改ざんすることに他ならないので、テキストの絶対的遵守を鉄則とする、こんにちのクラシック音楽界においては勇気を要する行動でしょう。更に、作品の価値と演奏効果を損なわないように作品をリライトすることは、演奏能力とは別のスキルであるという難しさもあります。でも作品を啓蒙してゆくための手段であれば、きつとリストは許してくれるはず。そういうフトコロの広さこそ、リスト

たる所以なのですから。

ちなみに・・・リストのピアノ曲を簡易にする作業は、結構行われています。Ossia が示されたら躊躇なく弾きやすい方を選べば良いし、「ハンガリー狂詩曲」は簡易版が何曲か出回っています（私は昔、ハワイのアラモアナショッピングセンターで第2番を入手しました）。ブゾーニは「ラ・カンパネラ」の普及版みたいなのを作ってます（全音版「バガニーニ練習曲集」に付録として収録されています）。メフィストワルツは元来がオケ曲なので、ショパンの幻想即興曲にも増して細部にたくさんの違いがあり、市販されているCDの演奏全てが異なっていると思えるほどです。

三戸誠さんのリサイタルを聴いて

栗飯原雅子

5月22日(日)当協会の三戸誠さんのヴィオラリサイタルを聴いた。

昨年リニューアルオープンした銀座のヤマハホールは、333席というこじんまりとしたホールだが、天井が高く、壁面も音響を考えた木の温もりを感じる作りになっている。大きな楽器の中にいるようだ。観客は、ほぼ満員。いよいよ開演だ。

いつもの穏やかな、そして堂々とした三戸さんが舞台に出て来た。一曲目は、ブリテンの「ラクリメーダ ウランド 歌曲の投影作品48」最初の音、「いい音だ。」ヴィオラを、地味な目立たない楽器だと思っている人は、大きな間違いである。一番聞きやすい音程を持つこの楽器こそ、自然に人間の耳に馴染み、いくら聞いていても疲れな飽きのこない楽器なのである。さて、ブリテンのような現代音楽では、そのハーモニーとメロディの複雑さと共に休符に面白さを感じられる。ホールに響く音楽と一瞬の静寂。一曲目にブリテンを持つてくるところに三戸さんのセンスと意気込みが感じられる。聴衆もグッと引き込まれる。

二曲目は、シューマンの「おとぎの絵本 作品113」歌曲やピアノ曲は、良く知られているが、ヴィオラのためのこの作品は、シューマンらしいロマンティックな曲でやや抑えた感じの上品な演奏だった。

一部の最後は、ピアソラの「ル・グラン・タンゴ」。プロムナードコンサートでも、熱い演奏を聞かせていただいたが、弦楽器のあらゆる技法を駆使し、独特のリズムにあわせた大変面白い曲である。

休憩、ロビーの大きな窓から銀座を眺める。

二部の最初は、フンメル作曲「モーツァルトの主題による幻想曲」。学生時代にトランペットの伴奏をしたなど思いながら、プログラムの解説を読むと「フンメルは、モーツァルトの家に住み込みでピアノを勉強しました。」とあり、へえ〜っ！そうだったのかと、感心する。モーツァルトの有名なオペラのアリア「イヘル

もう、900回でございます。

会長 中根富美代

ミオテゾーロインタメント」をモチーフにした古典の曲をオーソドックスにきちんとまとめた心地よい演奏だった。

続いてブラームスの歌曲から「2つの歌 作品 91」。メゾソプラノの加納悦子さんは、大変魅力的な声の持ち主でヴィオラとの相性もバッチリ！素晴らしいアンサンブルを聞かせてくれた。

プログラムの最後は、ブラームスの「ソナタ 第1番 作品 120-1」ブラームスの情熱的な中にもどこか憂いのある音楽をヴィオラという楽器が、実に見事に表現していて、このソナタの中にブラームスの生涯(解説の中にもあったシューマンと彼の妻クララとの関係も)を見るような演奏だった。

なりやまない拍手に応じて再度メゾソプラノとの共演で、コンサートを締め括った。

共演の小原孝さんは、コマーシャルやNHKテレビの「趣味悠々」でも有名なピアニストで、さすがに素晴らしいテクニックと音楽性でオーケストラのようなダイナミックな音から繊細な音まで自由に操れるピアニストだった。

ピアノの時に、帽子を被って出て来て、お洒落な一面をのぞかせていた。彼の作曲した猫のジル君のウィットにとんだ曲もこういうところからうまれるのだと思った。

ヤマハのホールなのにベーゼンドルファーを弾いているところにヤマハの懐の大きさを感じるとともに、やはりヴィオラや歌と合わせる時には、ベーゼンの深くあたたかい音色がいいなと思った。

幸せな時間を過ごせたコンサートだった。

プロムナードコンサート 900 回 !!

プロムナード・コンサートは、1988年1月の第1回から回を重ねて今年の10月で900回を迎えます。これを記念する特別コンサートを開催致しますので、どうぞ皆様ご期待下さい。

プロムナード900回記念コンサート

2011年10月30日(日)14:00~16:00(予定)
江東区文化センター3階レクホール(入場無料)

二部構成(一部器楽、二部声楽)で、良く知られたクラシックの名曲を集めてお送りします。

日頃より、応援して下さいのお客様と共に、多年にわたり900回も続けて来られた事に感謝する、お祝いのコンサートです。

900回に寄せて、中根富美代会長よりメッセージが御座いますので、ご紹介致します。

江東区文化センターの談話ロビーにおきまして、金曜日のお昼休みに開催されておりますプロムナードコンサートをご存知の方も多いと思いますが、この秋10月で900回を終えます。

そこで、来る10月30日(日)、当センターのレク・ホールをお借りして、記念のコンサートを催すことに致しました。

800回記念でお祝いのコンサートをさせて頂きましたのが、ついこの間のように感じられますが、センターの強いご協力に加え、聴衆の方々が、不安の多いこの時節にもかかわらず、たくさんお集まりくださったその日その日を思い起こしてみますと、決して短い間ではなかったと痛感するとともに、感謝の他はございません。出演者、実行委員及びすべての協会員が、一回一回を大切に、めげる事無く責任を果たしてくださったことに、誇りを持つ私でもあります。皆様ありがとうございました。

800回には、第1回の開催に力を注いでくださった、そのときの所長、恩田大進氏、毎回わかりやすく解説をして盛り上げてくださった設楽秋夫氏に感激のお祝辞をいただき、山崎孝明江東区長からは、900回、1000回と続いて、江東区がいつでもどこでも音楽が聴ける、音楽があふれる街になるように、と熱いお励ましを頂戴いたしました。

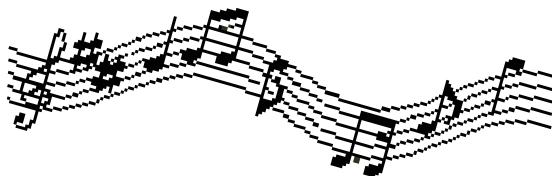
今回は、大震災もまだまだ後を引いておりますし、晴れがましい祝典は1000回に譲り、元気に楽しくお客様とひとつの時間を過ごしたいと思います。

この際にあたりまして、会報「パウゼ」を第1号から読み返してみましたところ、第2号に賛助会員の方の文章が載っていました。お昼休みに「水曜昼寄席」というのがあり、お友達に誘われていらして、初めて金曜日の「昼コン」を知られ、第31回からほとんど欠かさないとありました。この方は、もともと音楽がお好きだったが、軽音楽やフォークソング中心で、クラシックはどちらかという敬遠していらしたそうです。でも聴きなれて、クラシックが一番になってしまったそうです。心が和らぎ、気分が安定するとも書いておられます。何と18年も前の投稿なのです。さらにこの方は私ども主催のロマコンで、オペラのコーラス隊を募集した時にお声をかけたところ、ご夫婦で参加、厳しい練習にも耐えて、以来何度となく立派にステージをこなしていらっしゃるのです。ここまでとは申しませんが、少しずつでも音楽を身近に生活の中に取り入れられて、情操豊かな日々を送って下さる方が増えますようにとの私の希いは今後とも絶えることはないでしょう。

どうぞ音楽家協会をこれからもよろしく願いいたします。

【協会主催公演情報】 イヴニング・コンサート

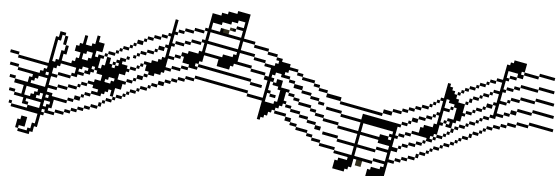
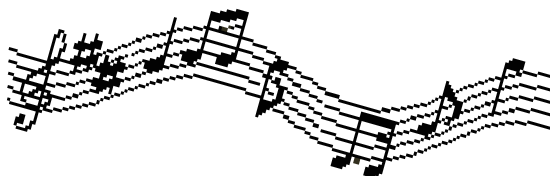
2011年8月26日(金) 18:00~19:30
江東区文化センター2階 談話ロビー (入場無料)
生誕200年を記念して「リストに集うピアニスト達」
出演: 井手尚子 影山 香苗 片岡慎之輔 佐藤恭子
田染泉 西脇千花 本村佳子 (50音順)
司会: 原育美



プロムナード・コンサート

各回とも金曜日 12:00pm 開演 江東区文化センター2F ロビー

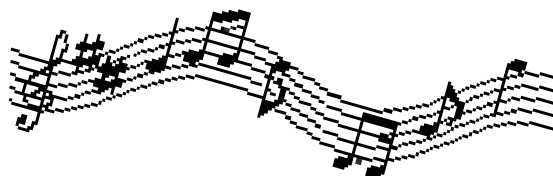
9月9日 第895回
田崎豊子 (ソプラノ) 松原 一郎 (トランペット)
住吉 和織 (ピアノ)
9月16日 第896回
杉山茂 (ヴァイオリン) 戸張勢津子 (ピアノ)
9月30日 第897回
高橋一真 (口笛)
10月14日 第898回
堀美子 (ソプラノ) 奥出かおり (ピアノ)
10月21日 第899回
佐藤恭子 (ピアノ)
10月30日 (日) 第900回
プロムナード900回記念コンサート
(14:00~16:00 (予定) 3F レクホールにて)



ティアラ・マンズリー・コンサート

各公演とも金曜日夜間 ティアラこうとう小ホール

Vol. 148 9月2日
うたのタベ 秋、月の光によせて
Vol. 149 10月7日
Espoir Concert Vol. 6 ~世界音楽紀行~
Vol. 150 11月4日
ピアノ三重奏と室内楽の響き
「ドヴォルザークの室内楽を集めて」
Vol. 144 11月18日(4月の延期公演)
下川麗子ピアノリサイタル「メンデルゾーンのタベ」
Vol. 151 12月2日
歌とフルートのタベ Vol. 3



◇◇ 編集後記 ◇◇

今回はリストを取り上げましたが、私も好きな曲がありまして、それはピアノ協奏曲第2番。学生の頃、仲のいい友達が練習していたのを聞いていて、カッコいい曲だと思って。有名な第一番よりお勧めです。一度、聴かれてはいかが？

発行:平成23年7月24日
編集:門倉(パウゼ編集長)